

羅臼岳 斜里岳(87)

小生の女房は札幌の出身。義母は今も札幌にいて健在なので、北海道には里帰りという大義名分があつて女房ともども行きやすい。

2011年には、北海道に入ってからのアシを確保するためマイカーで大洗からフェリーに乗って北海道に渡った。昔は東京湾から出ていたので房総半島を回る余計な時間がかかったが、今は大洗から苫小牧に直線的に行くので、時間は短縮され、東京・札幌間で考えると、新潟・小樽航路と変わらない。

札幌で1泊して、2日目早朝に出発すれば北海道を横断して、羅臼の先の岩尾別のホテルに入ることができる。車の威力である。ただ、途中でハイオクガソリンを補充しようとしたら、「ハイオクはないので隣の町へ行ってくれ」と断られた。早め早めに給油しておく必要があるようだ。

泊まったホテルの名前は「地の涯」。はるか遠くまでやってきたことを実感した。

3日目、早朝に出発して羅臼岳へ。知床であればさぞかし涼しいと思いきや、無風の中で直射日光を浴びて、暑いことこの上ない。

北海道では、キタキツネの糞尿がエヒノコックスを媒介する。もしこれが人体に入ると10年から20年で肝臓がやられる。このため地中から湧いたばかりの湧水は飲めるが、露出した水は飲んではいけない。最初はこの鉄則を守っていたものの、我々の年齢ではエヒノコックスが発症する前に寿命が尽きると信じておおらかに湧水を飲んでいた。

羅臼岳はただひたすらに登るだけ。5時間で頂上に着いた。頂上の天気はまずまずで、北側にはオホーツク海、南側には国後島が目の前に広がっている。東側には知床半島がまだ続いている。日本の地の果てに来た実感が一層わいてきた。

4日目、斜里岳に登るために釧網線の清里町に入った。ここまでは地図とカーナビで無事辿り着けたが、この先この日の宿舎である清岳荘までが大変だった。カーナビは目標物と道路が機械に登録されていなければ機能しない。道路地図はあっても、トウキビ畑の中では現在地すら特定することが難しい。久し振りの未舗装道路は晴天続きで猛烈なほこり。神経をすり減らした一日だった。

5日目、登山道は明瞭で羅臼岳に比べれば登り易いし、距離も短い。小屋の管理人から、エヒノコックス対策のため小屋の水も煮沸してから飲むように言われたが、だんだん大雑把になってきた。

斜里岳からの眺望は、羅臼岳に比べると迫りに欠けるし、道東の土地勘がないので山を識別できないのが残念だった。

大雪山 雌阿寒岳(89)

女房は札幌の藤女子高校では山岳部に在籍して大雪山を歩いていたので12年にはセンチメンタルジャーニーとして黒岳から大雪を歩くことにした。

計画としては、マイカーで北海道に入る。層雲峡に車を置いて、黒岳に登って旭岳を往復後、層雲峡に戻る。そのあと雌阿寒岳に登り、帰りに十勝岳を歩いて札幌に帰ることにした。

1日目は、札幌を出てロープウェイの層雲峡駅に車を止めた。ロープウェイとリフトで七合目まで上がれるので黒岳石室までは歩行1時間半というところ。石室では寝袋持参、食事なしなので荷物は重くなるが行程が短いのでさほど過重ではない。

2日目は快晴。早々に朝飯を摂って北鎮岳へ。高山植物の最盛期を狙って真夏に来たのでお花畑は見事な花盛り。北鎮岳のチドリの雪形も浮き上がって見えた。

間宮岳からの旭岳往復は旭岳の登り道が水分をたっぷりと含んだ砂礫なので歩きにくい、急傾斜の雪渓も残っていた。旭岳の頂上は姿見からの登山客が多くやや込んでいたが、本州の山に比べたら問題にならないくらい少ない。

旭岳からは御鉢平を一周して黒岳に戻ったが、一日中天気は崩れることなく晴天が続いたので、はるかトムラウシまではっきりと眺めることができた。

この日は黒岳にもう1泊する予定だったが、順調すぎるくらい順調だったので黒岳石室に泊まらずに下山して、車を阿寒湖方面に走らせた。途中の糠平湖に手ごろなホテルがあったので、急きょ泊まることにした。マイカーの旅の良いところだ。

3日目は雌阿寒温泉に泊まり、4日目に雌阿寒岳に登った。明け方からの雨はそれほど強くはないが止む様子は全くない。しっかり雨具をつけて出発した。雌阿寒岳の登山は、標高差約800m、所要時間は登り3時間とたいした山ではない。登山者は女房との二人だけ。頂上では雨が降り続くうえ、ガスが濃くて何も見えない。ガイドブックの指示に従って噴火口に落ちないように時計回りに慎重に歩を進めた。

雌阿寒岳登山は午前中に終わったので、午後は十勝の白金温泉へひと走り。

5日目は十勝岳に登った。昔札幌にいたときに十勝岳に登っていたが、すべて厳冬期だったので雪のない十勝は初めてだった。ガスが晴れず遠望はきかなかったので、ひたすらに火山灰の道を眺めながらの登山となった。

トムラウシ 後志羊蹄山(91)

北海道に難しい山が二つある。幌尻岳とトムラウシだ。幌尻岳は渡渉の問題、すなわち天気にも恵まれるかどうか運の問題であり、トムラウシは長丁場の山歩

きに耐えられるかどうか体力の問題だ。13年にはこのトムラウシに挑戦した。

札幌から新得を経て、十勝川沿いに延々と北へ続く林道を走ってトムラウシ温泉の東大雪荘にたどり着いた。大雪山系の南に位置しながら東大雪と名付けられている。国民宿舎東大雪荘はそんな山奥にありながら、どこに出しても恥ずかしくない立派なリゾートホテルである。

一昔前はここから往復で12時間以上もかかったようだが、現在は林道が整備され、3時間くらい短縮された。我々は、10時間は覚悟していた。宿の人に話すと「トムラウシに登る人は大体午前3時か4時には出発します」と言う。我々は午前5時に出発と決めた。

登りの前半は大きな尾根を登ってコマドリ沢出合いに一度下りる。後半はコマドリ沢の雪渓を登って、高原状態のトムラウシ公園を横切り、だらだらとした長い登りを越えてようやく頂上に達する。

帰りの雪渓の途中で女房の膝が痛くなりスピードが落ちてしまった。大きな尾根の下りは膝をかばいつつ、へとへとになって宿に帰り着いた。結局12時間もかかってしまった。それだけに東大雪荘の温泉につかり、上等の料理とビールの夕食を前にした時は大きな満足感に浸った。

札幌に戻ってからは、後志羊蹄山に登って、函館から青森県の大間行きフェリーに乗ることにした。

後志羊蹄山は半日仕事と言う訳にはいかない。倶知安コースを採ったが、標高差は1500mくらいあるので登りは5時間とみた。

女房の膝は治らなかったので比羅夫温泉で一日温泉療養するというので、後志羊蹄山には単独で登ることにした。

夜来の雨はどうやら止んだもののガスはまだ晴れない。登山道はほぼ直登かつ急坂。ただひたすらに登り続けた。修行僧の心境である。頂上に着いてもガスは晴れず、噴火口も周囲の山も見えない。単独行で火口に落ちては大変なので頂上を確認してすぐに、そそくさと下山した。

6. 単独行

筑波山 赤城山(93)

単独行は日程調整の必要がないし自分のペースで気楽に歩けるので奥多摩とか丹沢の日帰り登山は単独行が多い。しかし、若年者以上にリスクは高まるので百名山に名を連ねる様な山では単独行は避けるようにしている。

筑波山は百名山の中で最も低い、標高871mである。深田久弥自身が「筑波山を日本百名山の一つに選んだことに不満な人があるかもしれない」と登山家から酷評されることを承知していた。それでも選んだ理由は「歴史の古いことである」と言っている。古い歴史の根拠が神話の場合は、必ずしも賛成しかねるが、

奈良時代から「大衆の遊樂登山も早くから行われていたのである」とすれば、神話でも宗教登山でもない民衆に根付いた登山が行われていたのであろう。

歴史をひもとかなくても、関東在住の人なら関東平野の中ですくと立ち上がっている独立峰は、関東の東の守り本尊としてあがめられていたことは確かである。

筑波山には、日の出とともにマイカーで出掛けたら、ロープウェイが動く前についてしまった。じっと駐車場で待ってロープウェイに乗るのも、歩いて登るのも時間的に大して差がないので、歩くことにした。女体山（イザナミノ命）と男体山（イザナギノ命）に参拝してすぐに下りた。

筑波山を下りてから車を西に走らせ、赤城山に向かった。道路がすいていたので午後には赤城山大沼（おの）のほとりに着いてしまった。ただ、すぐに登り始めても明るいうちに下山できそうにないので、登山は翌日に回し、大沼のほとりで車中泊をすることにした。夜に入って風が強くなり、車が風で揺れてしまう不気味さに一人で耐えた。

翌朝、春まだ浅い頃なので相当冷え込んだが、人一人いない中を歩きだした。深田久弥は赤城山を「高原と湖と牧場の洋画的風景」と言っているがこの風景も冬はさびしい。駒ヶ岳から黒檜山と歩いて車に戻ってもまだ家に帰るには早すぎるので、榛名山に足を延ばして掃部ヶ岳に登ってから帰った。

男体山(94)

日光中禅寺湖はどうしても観光地のイメージが強くて、男体山はどちらかという敬遠していた。しかし、男体山は日光富士という愛称が付けられているように富士山にそっくり、高さも 2500m もあり、どこから見ても男体山と識別できる。山に入ってしまうと観光地としての雰囲気はなくなるはず、と考えて夜明けとともに自宅を車で出て、観光客が目覚まさないうちに日光の街を通り過ぎた。

二荒（ふたら）山神社に車を止めて登り始めた。まだ雪の残る登山道をグイグイ登っていく。神社の修験者が修行のために登る道なのでジグザグに楽に登れる必要はない。標高差 1200m を殆ど直登だ。

この急坂を登り切って、真下に中禅寺湖、尾瀬の山々、男体山と一対をなす女峰山も良く見晴らせた。

素晴らしい眺めと冷たい空気で清々しい気分になり、男体山を敬遠していたことを恥じながら山を下りた。

武尊山 奥白根山（96）

女房が札幌に里帰りするというので、小生も出掛けようと思い立ち、上州武

尊（ほたか）に出掛けた。武尊山は大きな単独峰なので四方から登山道がついている。小生はこのうち尾瀬に行く時にいつも使っている沼田街道から入り武尊牧場から登ることにした。スキー用のリフトは夏も動かしているところが多くなった。以前は夏にスキー用のリフトに乗ることに抵抗を感じていたが最近では乗りなれてしまっている。牧場と山頂の標高差は 700m もあるが、頂上直下の急坂を除けばなだらかな樹林帯の道である。登ったのは 6 月の平日とあって登山客は殆どおらず静かな単独行になった。

武尊を下山して花咲の湯に浸っていたら宿を探す気もなくなってしまい、花咲の湯の駐車場で車中泊と決め込んでしまった。

翌朝は 10 分か 20 分も走ると奥白根山のロープウェイの駅に着いてしまった。始発を待ってロープウェイに乗るとあっという間に標高 2000m の山頂駅に着いてしまう。ここからは 3 時間もかからずに山頂に着いた。上信越国境では最高峰にもかかわらず、何ともあつけない登山だ。

ロープウェイやスキーリフトがどんどん高いところまで行くようになり、また雪のない時期も運転するようになって登山の庶民化が進んだということだろう。深田久弥が日本百名山を書いた昭和初期とは全く別の世界になってしまった。今の時代に深田久弥の百名山を持ち出して"百名山とは"を議論しても意味がないのかもしれない。環境が違いすぎる。

雨飾山(97)

慶應大学のアルペンクラブの懇親会が駒ヶ根であった。この会に出席した後、仲間を募って宝剣から空木岳に縦走したいと思ったが、賛同してくれる人が一人もいなかった。仕方なく雨飾山に登ることにした。駒ヶ根と雨飾山は 150km くらい離れているので“ついで”に行く山ではないことは確かだが、東京から雨飾山に行くのはもっと大変なので、一人で出掛けた。

早朝、食事もとらずに出発したので、登山口の雨飾高原キャンプ場を 8 時には歩き始めた。雨飾山の最大の特長は布団菱という名前の岩壁であるが、この山の行き届いた行程標識も他に例を見ない。

殆どの山では、遭難事故発生時に警察や消防に事故発生場所を知らせるための単なる番号を登山道に表示しているが、雨飾山ではもっと丁寧である。登山口から頂上までの 4400m を 11 等分して 400m ごとに 1/11、2/11 と等間隔に標識を立てている。ほとほと感心した。

頂上では白馬岳をはじめとする北アルプスの北部の山がパノラマのごとく展開していることを期待したが残念ながらガスで全く見えなかった。

浅間山(98)

2014年9月に御嶽山が噴火警戒レベル1の状態ですべて噴火して死者58名という大事故が起きてしまったが、その後も日本の各地で噴火騒ぎが起きた。深田久弥は浅間山の噴火について「最近20年間だけでも大小の爆発は1800回に及んでいる」と紹介している。火山の噴火といえば浅間山が出てくるのだ。浅間山も危ないのではないかと心配になって、噴火警戒レベル1のうちに急いで登ることにした。

急ぐ時には単独行がいい。4時半に自宅を車で出て、7時前には浅間山荘から登り始めた。前半の湯ノ平までは樹林帯の穏やかな登りであるが、その先の火山口原からは火山灰の斜面で吹きさらし。冷たく強い風に閉口した。それでも身の危険を感じることはない。

しかし、頂上直前には「危険区域のため立入禁止」の立て札、頑丈そうなシェルターを見ると火山の現場に入った実感がわいてきた。

下山後10日余りで浅間山の噴火警戒レベルが2に引き上げられ、つれて前掛山にも立入禁止の規制がかかった。小生は運が良かった。

7. 百番目の山

幌尻岳(99)

何年か前に北海道のトムラウシでツアー登山客が大遭難を起こし、その時の報告書で「幌尻岳は百名山の中で最も難しい山」と書かれた。これを読んだ女房は「どうしても幌尻に登りたかったら、必ずガイドをつけること」と実質的に止めにかかった。

しかし、中高年のご婦人を含め大勢の人が登っているのだから登れないはずがない。幌尻岳の経験者の話を総合すると、幌尻岳の難しさは2点あった。

第1点は、フェリー、宿舎、幌尻山荘の予約だ。幌尻山荘の営業は7月から9月だが、9月の沢水は我々には冷たすぎるので、入山できるのは7月と8月の2ヶ月間。山荘の定員は50人と少ないので、ここをおさえるには4月2日の予約開始と同時に行動を起こさなければ間に合わない。

それでいて計画実行の直前に雨が降って川止めになったら、計画自体が翌年に繰り下げとなってしまふ。天候次第、幸運に恵まれなければ幌尻岳には登れない。幸運か不運かは神のみぞ知ること。不運ならば百名山達成は1年先延ばしになってしまう。

2点目は渡渉である。幌尻山荘の手前3km、2時間の間に15回の渡渉がある。膝を越す沢水の中で川底の石はコケで滑るし、同時に渡渉と渡渉の間は山道を歩かなければならない。

この対策として、登山用の靴とは別に渡渉用の靴を調達して、5月に丹沢の水無川の上流で渡渉練習をやって靴の滑り具合を確かめてみた。

こうして予備日を含めて7泊8日の計画を実行に移した。

我々が幌尻山荘につく1時間ほど前からしとしとと雨が降り出した。沢の水が増える前に小屋に入ったが、翌日には川止めとなり一日中小屋で停滞。管理人は川止めがいつ解除できるかわからないので、食料を上手に食いつないでくれとのこと。1日の食事の量を半分にした。

次の日、東京を出てから5日目。雨が小ぶりになったので幌尻岳に登ることにした。頂上に登る分には渡渉の問題はない。しかしガスは晴れることがなく高山植物も半径10mの範囲しか見えなかった。頂上でその10mの範囲にキタキツネが現れた。2000mを超す山の頂上でキタキツネを見ることはあり得ない。喜んでいいのやら悲しむべきなのかよくわからない。

6日目、小屋の管理人から「これ以上小屋にいたら食料がなくなる。沢の水は減ってきたので、管理人自らがリーダーとなって宿泊者10人を下ろす」とのこと。我がパーティーの4人は結束し、太ももまで濡らしながら慎重に下りた(余談だが、17年には同じ状態で下山、渡渉中に2人が流され死亡した)。

予備日を1日設けていたので、東京までの帰路は当初計画通りに取り運べた。東京行きのフェリーでは、百名山の最難関の幌尻岳を無事終えた達成感と百名山完登が秒読みに入った喜びで眠れなかった。

火打山(100)

2017年の初めの時点で、百名山のうちまだ登っていない山は皇海山、魚沼駒ヶ岳、火打山の3座だった。いずれも登頂に失敗するような山ではない。幌尻岳が無事に終わったのであとはセレモニーをどこでやるかの問題だ、と思った。岡崎からも東京からも行きやすくて百名山登頂達成の祝賀会を開くのに適しているのは火打山なので、百番目の山は火打山に決めた。

日銀OBの3人と岡崎信金OBの3人が9月19日に戸隠小舎に集合した。あえて火打山の登山口である笹ヶ峰まで1時間もかかる戸隠に泊まったのは、この宿が本当に素晴らしくて祝賀会にふさわしい宿だからである。戸隠小舎の創設者はダウラギリ遠征隊長を務めた故佐々木徳夫さん。夕食は日本風にアレンジしたフランス料理だ。それでいて1泊2食9500円。安さの魅力にもひかれた。

午前5時に朝食(これは純日本料理)。6時には車で出発できたので、7時過ぎに笹ヶ峰から歩き始めることができた。

登山道は出だしのほとんどが木道なので極めて歩きやすい。笹ヶ峰から火打山の頂上までの9kmの間に、1kmごとに立派な標識柱が建っている。

高谷池ヒュッテまで3時間半。途中の富士見平を過ぎると、たおやかな火打山と噴煙を上げる焼山が現れ実に爽快な山歩きだ。完全予約制の高谷池ヒュッテは紅葉が本格的になる9月の下旬以降、4月の時点で満員だった。このため、

トップシーズンは諦めて少し早く来たのだが、イワイチョウの黄色の絨毯。ナカマドの赤等々充分見応えのある紅葉だった。オオヤマリンドウの紫も映えていた。

この日は高谷池ヒュッテに泊まるので、時間は十分にある。荷物もほとんどヒュッテに置かせてもらったので、軽装でのんびり、1時間半のところを2時間もかけて紅葉を楽しみながら登った。

頂上直下まで来たら、5番手を歩いていた小生に記念登山だからと皆が道を空けてくれ、頂上に揃ったところでやにわに「山田隊長 百名山達成おめでとう 2017年9月」の横断幕を広げて祝ってくれた。

山田隊長とは、岡崎信用金庫にいるとき役職名の方が呼び慣れているが、山では役職名はおかしい、とあたりさわりのない愛称をつけてくれたものである。ありがたいことだ。

翌日は妙高山に登って、戸隠小舎に帰ったら、東京と岡崎から友人、女房が駆けつけていて、盛大な祝賀会になった。友人のお嬢さんはわざわざ大きなケーキを焼いて「山田さん につぼん百名山 完登おめでとう」のプレートを付けてくれた。

以上